

---

# accident-アクシデント-

高天リオナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

accident - アクシデント -

### 【Nコード】

N9483S

### 【作者名】

高天リオナ

### 【あらすじ】

ごく普通のOLである千景ちかげは、すでに両親を亡くし、兄との二人暮らし。

そんな彼女の元へ、予定外の来訪者が・・・。

01・突然、視界に飛び込んで来た彼（前書き）

> i 2 3 1 7 3  
— 3 0 7 7 <

## 01・突然、視界に飛び込んで来た彼

「雫、今日もパス？」

「うん、ごめんね。ゆきちゃん」

終業時間になり、それぞれが帰り支度を始める中、私、千景ちかげと同期で親友のゆきちゃんこと、狭山さやま由紀江ゆきえのこんなやりとりは、すでに慣れた一コマになっているだろう。

今日は金曜日。社会人にとって華の週末の始まりともなれば、ストレス解消兼交流目的に飲みに行く人が多い。

けれど、私はもっぱら自分の部屋での晩酌が好みだったし、なにより、身内の束縛が激しく、ほとんどの誘いを断っていた。

「もう！今は一人なんだし、今日こそはって思ったけど・・・やっぱりダメ？」

「毎週、金曜の夜は電話が掛かって来るから・・・家にいないと、うるさいの」

「はあ・・・遠く離れて一層、チェック厳しくなったわけね。全く、未成年の子供じゃあるまいし、少しくらい大人の付き合いってものを考慮して欲しいわ」

落胆たつぷりの声に、苦笑うしかない。

根気強く誘ってくれるゆきちゃんとは対照的に、すでに“付き合いの悪い子”というレッテルが貼られているのか、他の同僚は目もくれずに横を通り過ぎて行く。

「狭山さん、そろそろ行くけど・・・話、まだ終わらない？」

それどころか、腰の重い私は邪魔なだけという視線を向け、親友

を呼ぶ始末。

はいはい、すぐに帰りますよ。

「ほら。呼ばれてる。早く行かないと、ね？」

「・・・あたしも行くのやめようかな・・・」

「大人の付き合いを考慮・・・でしょ。まあ、私自身、大勢でのお酒の席って得意じゃないからいいのよ」

「むー・・・月曜日に新しく移動してくる人材管理課長の話で、密かに盛り上がるうと思ってたのに・・・」

「他の女の子と盛り上がればいいじゃない」

「ミーハーな気持ちからじゃなく、真面目にどんな人かって話をしたかったの！なんでも、かなりの美形な上、相当なやり手らしいよ」

かなりの美形って・・・それ、思い切りミーハーな気持ち入ってない？

矛盾に苦笑しつつ、参加を渋りだしたゆきちゃんに、私はそっと耳打ちする。

「じゃあ、移動してくる課長の話は、現物を見てから改めてするとして・・・南條くんもいるんでしょ？むしろ、そっちのお土産話、期待してるから・・・頑張ってる」

「し、雫！」

意中の同僚の名前を出すと、頬を赤らめて軽く睨まれた。

普段、ともしっかりしている彼女は、色恋沙汰になると途端に少女のような反応をしてくれて、素直に可愛いと思う。

私にはそういう人がいないから、少しだけ羨ましい気もした。

「それじゃあ、お先に。お疲れさまでしたー」

「・・・おつかれさま」

まだなにか言いたそうな彼女から逃げるように、別れの挨拶をして、会社を後にする。

辺りはすっかり夕暮れ闇。初冬とはいえ、ぶるりと肩が震えるくらい、すっかり冷え込んでいた。

よし、今日は私もお家で晩酌だ！

……って言うほど酒豪なわけではないけれど、サワーやカクテルなんかの甘いお酒をちびちび飲みながら、ぼやーっと映画やドラマを見るのは好き。

バスを乗り継いで自宅マンション近くで降りると、帰路途中のコンビニとレンタルビデオ屋さんに寄り、晩酌に必要な各種アイテムを揃えた。

ただ……自分用の甘いお酒と借りたDVDが恋愛モノなのは、一人だからこそその選択肢。

いつも共に晩酌をしてくれる存在が、今はいない。

「……ホント急なんだから。しかもアメリカなんて、遠過ぎだよ」

誰に言うでもなく、そんな愚痴が自分の口から漏れた。

本当に遠い……そうそう、気楽に逢える距離じゃない。

上京してからずっと、一緒に暮らして来た。悲しいことがあった時は慰められ、嬉しいことがあった時は自分のことのように喜んでくれて……喧嘩もしたけど、誰よりも心強い味方だったのに。

今の私は　独りなんだ。改めて実感すると、寂しさが募る。

「はあ……いい大人なんだし、慣れないとだめだなあ。とりあえず・早く帰ろ」

沈みかけた気分を打ち払うように、大きく手を振って歩き出す。

見慣れたマンション。ホールに備え付けられたテンキーを押し、玄関のセキュリティロックを外す。エレベーターに乗り込んで、五階のボタンを押しした。

我が家はもう、目と鼻の先。

ポーンと到着を示すベルが鳴って、エレベーターを下りる。歩きながらカバンの中を探り、鍵を取り出した。

顔を上げた先、我が家のドアの前にもたれ掛かっていた大きな影が、私の気配に気づいてこちらを向く。

突然、視界に飛び込んで来た彼。

年の頃は20代後半？知的に整った顔にはノンフレームの眼鏡。きつちりスーツに身を包み、いかにもビジネスマンといった風体の、見たこともない男の人。

誰だろう・・・なにかの勧誘？

「・・・あのう、うちになにか御用でしょうか？」

注意深く近き、おそろおそろ声を掛けてみる。

が、彼は言葉なくジツと私の顔を、ただ、見つめた。

つま先から頭のとっぺんまで何度も往復する視線は、あまりに不躰で・・・ムツとしてしまうのは不可抗力というものでしょ？

「・・・用がないのでしたら退いて頂きたいのですが・・・中に入れませんし」

「あ・・・ああ、すみません。いえ・・・用はあります。ここは、千景ちかげき鏡の部屋ですよね？」

慌てた彼は小さく謝罪した後、そう訊ねて来る。

千景鏡・言うまでもなく身内。両親を無くした私の、唯一の肉親である実兄の名前だった。

ますます、彼の正体と用件が気になるところ。

「ええ、そうですが・失礼ですけど、どなたですか？兄に・なにかご用でも？」

「ということは、きみ・しずちゃん？」

私の質問を軽く無視して、やはりしげしげと眺めて来る視線。というか、“しずちゃん”って！？

「私の名前は確かに雪ですが・見ず知らずの方に、そんな呼び方される筋合いはありません」

不快感も露に視線を尖らせ、私を見下ろす眼鏡越しの瞳を睨んだ。一瞬、キョトンと惚けた顔が、次いで、困ったように笑う。

「・・僕のこと、怪しい人だって疑ってますか？一応、きみとは何度か話したことがあるのですが・」

当然、思い当たる節なんてなくて、ますます視線が尖った。

「見え透いた嘘吐かないで下さい。あなたとは初対面です」

「・・そうですね。実際に逢ったという意味では、初対面です。けど知らない仲ではありませんよ」

「はあ？」

「よく思い出してみてください。僕の声に、聞き覚えがあるはずですよ」

「声・」

言われてみれば・・・耳に心地良いこのハスキーボイスは、以前、どこかで・・・。

「あ」

そして・・・遠い記憶の中に、思い当たる節とやらを見出した。

柔らかい物言いが大人っぽくて、こんな落ち着いた素敵な雰囲気の人が・・・信じられないって、電話向こうの兄に軽口を叩いたのは、まだ、私が学生で寮にいた頃。

目の前の彼は、決して見えず知らずではない。

そう、彼の名は　。

「もしかして・・・かなめ、さん？」

「正解です。きちんとして挨拶するべきですよ・・・初めまして。  
つづきかなめ都築要と申します」

ニツコリと満面に笑みを浮かべ、お兄ちゃんの親友は小さく頭を垂れたのだった。

軽口が現実のものとなって目の前に現れ、多少、混乱しつつも、素性が解れば、張っていた気も緩む。

「は、初めまして。兄がいつもお世話になって・・・」

同じように会釈し掛け、第三者の気配に気づいた。私たちの横を、同階に住んでいるであろう名前も知らない隣人が通り過ぎる。

いつまでもこのまま立ち話というわけにはいかない。

慌てて、部屋の鍵を外し、ドアを開いた。

「・・・とりあえず、中に入ってください」

玄関の明かりをつけて靴を脱ぎ、率先して部屋の電気をつけて回る。

マメに片付けておいて良かった・・・。

どうにかお客さんを通せるだけの小綺麗な様子に、ホッと一安心。

「お邪魔します」

一拍置いて、要さんが部屋の中へと入って来た。手には大きな力バン。出張がてら寄ったとかかな・・・。

キッチンに立ってコンビ二袋の中身を冷蔵庫にしまい、食器棚からカップを二つ取り出しながら思う。

立ち尽くしたままの姿に気づき、慌てて声を掛ける。

「適当に座って下さい。今、珈琲入れますね。お砂糖とミルクいりますか？」

「いえ、ブラックで・・・。ありがとうございます」

勧めるままにソファへと腰を下ろした彼は、くると部屋を見回し、感心したように言った。

「随分と、部屋の様子が変わりましたね。なんだか・・・女の子らしくなりました」

「そう、ですか？うーん・・・私が色々と買い込んで揃えたせいかも・・・だって、お兄ちゃん、そういうの無頓着で・・・ものぐさ過ぎなんですよ」

「まあ、男の一人暮らしはそれでいいのでは？女性的には母性本能をくすぐられて、お世話したくなるでしょう」

「え・・・そういうものなんですか・・・」

あの兄がそんな男女の駆け引きで、無頓着なフリを？  
いやいや、違う気がする。

「実際、しずちゃん。放っておけずにこうしてお世話しに来ている  
みたいですし・・身内に効き目があっても、意味ありませんけどね」  
「はあ・・でも、私の場合は自分のためでもあるから、例外のよう  
な・・」

珈琲を満たしたカップをテーブルに置き、対面に腰掛けながら言  
うと、要さんは少しだけ眉を顰めた。

「自分のためだなんて・・どこまでも兄想いなんですネ。正直、鏡  
が羨ましい・・それで？肝心のお兄さんは、最近、仕事忙しいんで  
すか？今日も、帰り遅くなりそうです？」

腕時計を見る彼の仕草に、私も部屋の時計を仰ぎ見る。  
時刻はすでに八時を回ってしまっていた。

彼の口ぶりど、予告なく訪れた行動から察するに、今の我が家が  
どういう状況なのか知りえていないのかもしれない。

これ以上、引き止める訳には・・いかないよね。

「えーと・・忙しいというか・・要さん。なにも聞いてないんです  
か？」

「え？」

「お兄ちゃん、もう、日本にいませんよ」

「それはどういう・・」

「つい先日、アメリカに転勤になったんです。だから、いくら待っ  
ても、兄は帰って来ません」

「・・それ、本当、ですか？」

「はい」

予想通り、私が告げた内容に啞然とする要さん。

動揺がありありと見て取れる表情で口元に手を当てると、なにかを考える風にぐっと押し黙った。

重苦しい空気に居心地悪く思いながらも、彼の中で現状が消化出来るのを待つ。

ほどなくして、深い溜息が耳に届いた。

「・・・つまり、今、この部屋で一人暮らしをしているのは、しずちゃん？」

「そうです」

「・・・申し訳ないんですが、鏡に連絡取って貰えませんか・・・」

「へ？今・・・ですか？」

「はい。今すぐ。僕、鏡の向こうでの連絡先知らされてないですし・・・お願いします。国際電話で高くつく通話料は、請求して下さいって構いませんから」

「いえ、それはいいんですけど・・・ちょっと待って下さいね」

あまりに真剣な目と、どこか剣呑な様子に気圧される形で家電の受話器を取ると、慌ててダイヤルをプッシュする。

回線を繋ぐアナウンスの後、聞き慣れた声が電話口に出た。

『・・・もしもしい？なあんだよ、しずー。こんな朝っぱらから・・・』

ああ、向こうは早朝か・・・兄の不機嫌な声に時差を認識する。

「あ、お兄」

言いかけるものの、いつの間にか背後に立った彼に、言葉なく受

話器を奪われた。

驚いて振り向いた先にあったのは、壮絶なまでの冷気を宿した笑顔。こころなしか目も据わってるような・・・。

急激な変化に戸惑い、どうしたのか訊ねようと口を開きかけたのを、静かに・・・と人差し指一本で制された。その指が電話のスピーカーボタンを押す。

私にも聞こえるようにという配慮なのだろうけど・・・意図はまだ読めなかった。

『急用じゃないなら、また後で掛け直してくれ』

兄の音がリビングに響くと、大きな手のひらが私の肩を叩き、端正な顎がソファアームを差し示す。

「珈琲、冷めちゃいますよ」

電話口を抑えた彼に言われ、流されるようにソファアームへ舞い戻った。

『疲れてんだ、切るぞ』

こちらの状況などおかまいなしに、一方的な勝手をしようとする兄に、要さんの目がますます剣呑な光を宿して眇められる。

「この電話を切ったら、後悔することになるぞ」

『あ？・・・ちよ・・・なんで男が・・・罨？？』

「よもや、親友の声を忘れたわけじゃ、ないだろう？鏡」

それと解る低い低い声音で、電話向この寝坊助に挑戦的な言葉。数秒の沈黙の後。。

『・・・つつつつ!?・・・オマエ・・・か、要!?なんで?・・・!』

一気に眠気が覚めたという風に、慌てふためいた兄の声。

この一本の電話により、私の生活が大きく崩れることになるうとは・・・。

01・突然、視界に飛び込んで来た彼（後書き）

余計かもしれませんが、挿絵を追加しました。

左から主人公の雫。来訪者の要。兄の鏡になります。

## 02・ドアを蹴破って

兄にとって、その電話相手は不意打ちだったに違いない。

『待て、おい。なんで要がうちの電話使ってた？今、うちに居るのか？』

「なぜ？それはこちらの台詞だ。携帯に電話しても繋がらない。メールをすれば弾かれる。家の電話は“現在、使われておりません”。一切の連絡手段を断られた挙げ句、こうして足を運んでみれば、アメリカに転勤したなどと。一体、どういう了見で、無下に扱ってくれたのか、納得の行く説明をしてくれないか？鏡」

クイツと眼鏡のフレームを押し上げ、一気に捲し立てる要さんは、誰の目から見ても怒っているのが解る。

私と話していたときと、口調も全然違うし・・・雲行きは怪しい方向。

はつきり言って、お兄ちゃんはオレ様気質で自分の興味の薄いことに対しては、呆れるくらいずさんだ。

要さんへの連絡も、優先順位が低かったのだらう。彼の言う“無下な扱い”はきつと的を射ているに違いない。

仕方ないな・・・助け舟出してあげるか・・・。

「・・・すみません、要さん。家電が繋がらなくなったのは私のせいです。悪戯電話多くて・・・どうやら、番号覚えられてしまったみたいだったので、つい最近、番号変えちゃったんですよ」

これは本当。

お兄ちゃんにも相談して、問題がないか確認した上で変更したというのに・・・こんなところで影響が出るなんて思わなかった。

申し訳ない気持ちいっぱいで見上げると、彼はなるほどと笑う。

「ですが・・・それ、鏡は知っていたのでしょうか？」

「え？ええ・・・」

「では、きみに落ち度はありませんね。兄だからと、甘い顔してはだめですよ」

やんわりと介入を拒む姿勢に、それ以上、私はなにも言えなくなってしまうた。

チツと小さな舌打ちが聞こえ、兄の声もまた、不機嫌色に染まる。

「つか、連絡はしようと思ったんだよ。けど、オマエ忙しそうだったし、俺も引き継ぎやら手続きやらで暇がなくてな。ワザとじゃねーんだ。そう、カリカリすんなよ」

「・・・わざとじゃない？それこそ、電話一本で済む話だろう。第一、僕がこちらへ栄転になった話をした途端、連絡手段を断ったように思えるんだが・・・故意だと感じるのは、僕の気のせい？」

「き、気のせいだろ・・・」

お兄ちゃん・・・声裏返して言ってちゃ、認めるようなものよ・・・。それが本当なら、なぜ？という要さんの戸惑いは痛いほど解る。

ここは彼の言うようにフォローなしで、きっちり納得のゆく説明をして貰うのが筋かもしれない。

「　　そうか・・・それはすまなかった。では、以前に交わした約束果たしてくれるんだろうね？僕はそのつもりで、今日、こちらへ伺ったわけだが？」

「オマエ・・・その状況見て言うのか？俺は今、アメリカで暮らしてんだぞ。無理に決まってるんだろ！」

「・・・いや、無理なことはないんじゃないか？　　しずちゃん。鏡

が使っていた部屋つて、今、どうなってます?」

「え・・・お兄ちゃんの部屋ですか?ええと・・・そのままですけど」

「お掃除とかは、どうしてました?」

「もちろん。ちゃんとしてますよ。放っておくと、埃かぶっちゃいますし」

唐突に話を振られ、面食らいながらもそう答えた。

「しずちゃんが綺麗好きで良かった」

につこりと微笑む顔。つられて微笑んだ私の顔は、次の会話で引き攣ることに。

「というわけで・・・部屋は空いてるそうだ。問題なく、今日からでも生活できそうだよ?お兄さん」

『も、問題は大有りだろー!どこの世界に、他人・・・しかも、初対面の男と可愛い妹の同居許す身内が居るんだよ!!』

ちよつと・・・待った。

なんだか、ものすごい単語がでたような気がする。

「初対面じゃない。一応は、“知った仲”だ」

『っ・・・屁理屈言ってるじゃね。絶対ムリ、許さん。つか、栄転なら社宅とかあんだろ?そつち行け!』

「それこそ、今更無理。荷物は全部、ここに届くように送ってしまったし、唯一空いていた社宅は他の社員に譲ってしまった。下手に転勤を隠し立てしたり、僕を無視しようとした鏡が・・・すべて悪い。誰が何と言おうと、僕はここに　住む」

ここに住む?要さんが?それって・・・それって・・・

「えええええ！？」

予想外の展開に、私は素面の状態でソファーから転げ落ちたのだ。  
った。

「……つまり。要さんは、半分、この部屋の主ということよね？お兄ちゃん」

『……一応。けど、最初だけだし、あれだったら、金は返す』

「そういう問題じゃないわよ！」

ぴしゃりと電話向こうの兄を叱り飛ばし、大きな溜息を吐いた。

その後、私の動揺を察した来訪者は、事細かになぜそうなるのかという経緯を教えてくれた。

要さんの話によれば……元々、この部屋は彼とお兄ちゃんがルームシェアで住む予定になっていて、契約した矢先、要さんは地方への出向が決まってしまったそうだ。

けど、当時、敷金礼金を支払える余裕がお兄ちゃんにはなくて、実入りの多かった彼が全額、出資してくれたらしい。

もちろん、いくら親友とはいえ、一方的な借りを作る立場を嫌った兄は、後々、必要があれば部屋を提供するという約束のもと、その好意を受け取った。

よって、要さんの要求と主張は筋が通っている。

むしろ、恩を仇で返す真似をしているのはお兄ちゃん。

となれば、私がすべきことはただ一つ。

受け継いだ受話器はそのままに、真っ直ぐ彼を見て言う。

「……事情は解りました。本当なら、私が出て行くべきなのでしょう

うけど・・・住み慣れたところで居心地いいですし、引っ越す余裕もありませんし・・・要さんがご迷惑でなければ、私とルームシェアして貰えませんか？」

「喜んで」

都合の良い申し出を、要さんはあっさりと笑顔で受け入れてくれた。

とりあえず・・・今まで通りの居場所を確保できた、のよね？私の選択は間違っていないはず・・・。

反面、一時の感情に流された衝動的とも思える言動に、浅はかだと自分を罵る部分もあり、耳にうるさく響いた抗議は、必要以上に癪に障る。

『しず！？なに言つて・・・ダメだ！お兄ちゃんは認めんぞ！』

「一体、誰のせいで事態がややこしくなつたと思つてんの？住まいに関する当事者は私。未成年じゃあるまいし、兄妹の縁切られたくなかつたら、これ以上、筋の通らない身勝手な我が儘言わないで！」

一喝の元、罵る自分をも叱りつけた。

そう、私は年齢的には立派な成人。社会に出て、しっかり働いてもいる。自分のことは自分で決め、言動と行動に責任を持つべき大人。

口に出して、こうすると決めた以上、それを全うするのよ。

『ぐっ・・・解つたよ・・・。おい、要。聞いてんだろ？いいか、妹に手出してみる・・・親友の縁切るからな！！んで、傍にいる以上、変な虫つかねーように全身全霊を賭けて護れ！』

「お、お兄ちゃん！！！」

「わかつた」

まるで八つ当たりするみたいな兄の物言いに、親友の彼はただ、苦笑する。

矛盾した両極端な要求に、本気で頭痛がした。なんてこと言うのよ、恥ずかしい……。

『……零。要が妙な行動起こすようなら、何時でもいいから電話を』  
『……馬鹿なこと言ってないで……切るわよ！おやすみなさい！』

それこそ、男女差を意識するに十分な要らぬ心配に、私は大急ぎで電話を切った。

はぁ……もう……疲れる。

「相変わらず、極度のシスコンですね。鏡は」

「お恥ずかしい限りです……」

「いや、こんなに可愛らしい妹なら、心配して当たり前ですよ？僕も放っておかないと思う……鏡の気持ちは、すごく解ります」

肩を落とした私を見、要さんはどこまでもにこやかに、やんわりとした口調で首を振った。

いくら古い付き合いの親友だからって、あんな失礼な発言と態度をされてなお、こんな風にフォローしてくれるなんて……しかも、女性に対する配慮も忘れないとか。

ああ、お兄ちゃんには勿体ないぐらい善い人だ。

「ともあれ……これから宜しくお願いしますね。そして……いきなりきみの生活圏に入ることになってしまって、すみません。どうか、今まで通り、気楽に……いえ、今まで以上に仲良くして下さい」

「あ・・・は、はい。こちらこそ・・・宜しく願います」

紳士的に丁寧な挨拶をされ、背筋が伸びる。

気楽にと言われても・・・物腰が全然違う。空気みたいに慣れ切った兄の気配とはほど遠い存在感に、正直、戸惑いと不安と、少しの後悔が生まれた。

私、平穩無事に暮らしていけるのだろうか・・・。

小さく溜息をつき、不安要素を盗み見て・・・ようやく、それに気づいた。

広い肩が小刻みに震えている。どれくらいの時間、玄関先で待ちぼうけていたんだろう・・・。

「・・・要さん。良かったら、先にお風呂入ります?」

「え?・・・いや・・・」

「今日はかなり冷え込んでいるし、そのままじゃ、風邪引いちゃいます。初っぱなで寝込んだりしたら、幸先悪いですよ?今日は、いわば私とあなたのはじまりの日なんですから」

これから、要さんとは一つ屋根の下、寝食を共にする・・・いわば生活仲間。お互い支え合える部分があるなら、遠慮は無用というものの。

「はじまりの日・・・ですか。・・・そうですね。わかりました。

お風呂戴きます」

感慨深気に呟いた彼が大きく頷く。

うんうん、気恥ずかしいだなんて言ってられないものね。

「ええと、バスルームはあそこです。タオルとかはご自由に・・・着替えとかありますか?兄のが少し残っていたと思うので、なければそ

れを・・・」

「いえ、今日明日しのぐ程度の着替えは持参してます。荷物は明日あたり届くよう手配してありますし、問題ないです」

「なら大丈夫ですね。それじゃ・・・私、兄の部屋を整えておきます。脱いだスーツ類はソファアの上にでも置いてください」

「有り難うございます」

これがお兄ちゃんなら、目の前で脱いでよこす場面だけど、身内の男性相手に同じというわけには行かず・・・難しいところ。

と、今日のご飯どうしょ・・・。晩酌の予定だったから、ご飯らしいご飯ないんだけど・・・まだ、出前頼めるかな？最悪、もう一度、コンビニに買出しかなあ・・・。

そんなことをぼんやり思いながら、お兄ちゃんの部屋へ足を踏み入れ、とにかくベッドを綺麗に整えた。空っぽのクローゼットや家具などの出番は、要さんの荷物が届いてからだろうし、今は別段、気にするものではない。

「もう・・・いいかな」

彼の姿が浴室に消えているであろう時間を見計らってリビングに戻ると、ソファアの片隅にスーツの上下とネクタイがお行儀良く纏められていた。

「でかつ・・・」

それらを手に取り、丁寧に折り畳みながらハンガーに掛ける。

兄のものより一回り大きい・・・そういえば背後に立たれた時、見上げた先にあつた顔は頭一個半分高い位置にあつたな。私が160センチぐらいだから・・・確実に180センチは越えてるわね。モテそー。

そこで八々と気づく。

要さん、彼女とかいるのかしら・・・もしいるなら、親友の妹とはいえ、女である私と同居というのはマズインじゃ？

ルームシェア申し入れる前に、お兄ちゃんに訊けば良かった・・・。

「面と向かつては・・・訊き辛い・・・」

うーん・・・そうだ！当初の予定通り、晩酌すればいいんじゃない？お酒の席なら気も緩むし、さり気なく話題にして訊けば自然。

でも・・・甘いお酒なんて、男の人には物足りなそう。せめてビールよねえ・・・やっぱ、買いに行くか・・・。

思い立ったがなんとやら。自分の部屋に入り、手早く着替えると、お財布を手に玄関へ足を向けた。

タイミングよく隣接するドアの一つが、熱気と共に開き、ふわりと石けんの匂いを漂わせ、頭からバスタオルを被った長身が姿を現した。

「あ」

水も滴るイイ男前・・・圧倒的な色香漂う姿に、思わず目を奪われて、しばし放心。

「お先に戴きました。・・・しずちゃん？どこか・・・出掛けるんですか？」

「声か掛かり、ハツと我に返った。コクコクと頷く。」

「えっと・・・コンビニにでも行くかうか？」

「ん・・・なにか足りないものもあります？」

「その・・・今日は晩酌するつもりで食事類とか用意してなくて。ど

うせなら、要さんと飲み交わして親睦を深めるのもいいなって思っ  
たんです。でも、肝心のお酒が私好みに甘いのがなくて・・・」  
「ああ・・・そういうことですか。それなら・・・やはり必要ないです  
よ。手土産持参しました」

にっこり微笑んだ彼は、手荷物の大きなカバンを探ると、中から  
二つ箱を取り出し、リビングのテーブルの上に置いた。

一つは洒落たデザインの縦長な箱。もう一つは漢字がプリントさ  
れた包装紙に包まれた横長な箱。

「これは・・・？」

「日本酒と押し寿司。相手こそ違いますが・・・僕も晩酌する気だっ  
たんです」

「お寿司！これなら小腹も満たせるし、丁度いいですね。正直、ご  
飯どうしようかと困っ・・・」

とと・・・思わず本音が転げ出た口を慌てて押さえるものの、時す  
でに遅し。

「・・・なるほど。晩酌は夕飯を誤摩化す隠れ蓑でもあるわけですね  
？」

クスツと鼻で笑われ、なんとなく自尊心が傷つく。

「っ・・・違うんですよ！？これでも、普段はちゃんと自炊してるし、  
冷蔵庫の中身だって豊かなんです！晩酌は週末限定の手抜きという  
か・・・ストレス解消というか・・・とにかく、料理が出来ないわけじ  
やないですからね！私の作るものは美味しいですよ！？」

気づけば、子供じみた言い方で必死に自分をフォローしていた。

そんな様は火に油を注ぐだけで、ますます笑いの色を濃くした要さんは、完全にからかう口調で言う。

「では・・・明日はごちそうを期待していいってことですか？」

「え？」

「・・・和食がいいですね。煮物に焼き魚、ダシ巻きと・・・お味噌汁。独り身の男って、家庭の味に弱いんです。僕の中で、しずちゃんの株がグツと上がりますよ？」

独り身・・・ってことは、彼女いないんだ。

軽口の中の単語を拾い上げ、内心でホツとする。これで心置きなく、誰に遠慮することもなくルームシェアできる。

「けど・・・買い物行かないと材料ないですよ？とりあえず、今日は飲み明かしましょう！今、小皿とグラス用意するので座ってて下さい」

心に引つ掛かっていた難問が消化したおかげだろうか。素直に状況を楽しもうという余裕すら生まれた。

そこで待ったを掛けたのは、湯上がりの紳士。

「しずちゃんは、お風呂どうするんです？なんだったら、上がるまで待ってます。さすがに、飲んだ後入るわけにはいかないだろうし・・・」

「あーえーと・・・私、明日、朝イチで入るからいいです。要さんほど身体冷えてないです。今は・・・お腹の方が限界ですから」

意地汚くも、チラリとお寿司を見て言う。これはほぼ言い訳的演技だったのだけど・・・だって、私の風呂上がりなんて待っていたら、それこそ彼は湯冷めして本末転倒。

「・・・わかりました。実は、僕もお腹空いてたんです」

すぐにこちらの意図を汲み取ってくれたのか、要さんは笑って包みを開けたのだった。

顔を突き合わせたのは確かに初めてで、初対面ではあったのだけど、兄との繋がり上、電話で話したりしていたせいも、私たちはすぐに打ち解けた。

会話は弾み、お寿司は美味しかったし、お酒も進んで・・・気づけばあつという間に朝。

先に目を覚ましたのは私。お互いに気分良く酔い、すっかりソファで寝入ってしまったようだ。

「・・・お風呂・・・入んなきゃ・・・」

まだ、アルコールの抜けていない身体ながら、彼が起きる前にシヤワーだけでも浴びてしまおうと思ったのが間違い。

熱いお湯を頭から被り、身体と頭を洗ったところまでは覚えていた。

不意に、ぐにやりと視界が歪んで・・・そこから先の記憶がない。

「ちゃん・・・？・・・しずちゃ・・・音・・・大丈夫・・・・・・震っ！？」

遠くで微かに私を呼ぶ声が聞こえた、次の瞬間、それがドアを蹴破って。

### 03・砂糖菓子のような笑顔

頭が重い・腰が痛い。

「・・・ん・・・」

目を開ける。

柔らかな陽光に照らされた明るい天井が、視界に広がった。  
見慣れたそれは、確かに自分の部屋のもので・・・あれ？私、シャ  
ワーを浴びてたはずなのに・・・。  
曖昧な記憶を探りつつ、とにかく、身を起こす。

「痛っ・・・」

途端、鈍い痛みが頭と腰を襲った。

「なん・・・え・・・!？」

自分の姿と、置かれた状況に啞然となってしまう。布団を掛けて、  
ちゃんとベッドで寝ているものの、身につけているモノがバスタオ  
ル一枚つてどうということ？

しかも・・・ある意味、まるで作られたドラマみたいにお決まりな  
光景が広がっているじゃないの。

そう、あられもない姿の自分の隣に、男の人が寝ているという。

「・・・要、さん・・・よね・・・？」

眼鏡を外した寝顔も、それはそれは端正で、目の前の彼が甘やかな存在であったなら笑顔で見守ってしまうところ、今の私はといえば、真逆の表情で呆然とそれを見つめた。

ど、ど、ど・・・どういう・・・私、たち、ナニを・・・？

思い出せ、よく思い出してみよう。

昨晚の突然の訪問から、兄とのやりとりを経て、ルームシェアすることになって・・・これから宜しくの意味も込めて晩酌して・・・心地の酔い酒の席だった。

で、二人して寝入っちゃったみたいで、気づいたら朝になっていて・・・私は昨日、お風呂に入っていなかったのよ。

だから・・・要さんが目を覚ます前に浴びてしまおうと、酒気の残るふわふわした感覚のまま、入って・・・入って・・・？

「・・・どうしたんだっけ・・・お風呂から上がって、着替えた記憶がない・・・」

「ええ。ちゃんと上がってないし、着替えてもいませんからね」「っ！？」

真横から掛かったハスキーヴォイスに、ビクリと身を震わせて固まる。

ギギギと油の切れかかったロボットのごとく、ぎこちない動作で声の主を仰ぎ見れば、いつの間に目覚めたのか、半身を起こしている彼。

「おはようございます、しずちゃん」

「お、お、おは・・・？」

「気分は・・・どうです？身体、辛かったりしませんか・・・？」

心配気に覗き込んでくる視線は、私への真摯な気遣いが感じられたものの、その発言にギョツとしてしまう。

頭の痛みの理由は解る。きつと二日酔い。

けれど、この腰の痛みは・・・身体、辛くないかって、それはつまり、アレですか・・・？

「無理させましたよね・・・すみません。もっと、早くに気づいてあげべきでした。血は出てなかったと思うんですが・・・」

やっぱり、私たち・・・一線を越えてしまったんだ・・・。

決定打とも思える言葉を耳に、サアアっと血の気が退いた。

・・・こんなのとてない。

そりゃ、知り合って間もないのに、全面的に信用してしまったこちらがまず、甘かったんだろうし、お互い酔った勢いでそういう流れになったのだとしたら、非は平等。

だからって、割り切れることと割り切れないことが、世の中にはある。

別に後生大事に護ってきたわけでないにしろ、記念すべき初めての体験を全く覚えていないなんて・・・悲し過ぎる。

胸の内を埋め尽くした苦い想いは、そのまま形となって私の目から溢れ出た。

「し、しずちゃん！？そんなに・・・痛みます？打ち所悪かったんですかね・・・病院連れて行きましょうか？」

「・・・」

「・・・本当に申し訳ないです。こんなことになってしまって・・・」

情事の相手に泣かれ、要さんは狼狽えた声で氣遣ってくれる。

そんな好意すら、罪悪感から来ているんじゃないかと思うと、余計に惨めな気持ちになった。

「・・・だい、じよぶ。・・・寝てれば、おさまります・・・たぶん・・・」

破瓜の痛みで病院に駆け込むなんて、聞いたことがない。どう考えても一時的なもので、間を置けば治まるだろう。

幸いにも今日は土曜日。週末の休日おとなしく身体を休めれば、月曜には支障なく仕事に行けるはずだ。

「ですが・・・」

「とにかく、服、着たいんで・・・出て行って・・・もらえ、ません？私、バスタオル一枚なんですけど・・・」

ぐしぐしと涙を拭いつつ、軽く睨みつける。

「あ・・・すみません・・・さすがに服までは着せられなくて・・・僕も男ですし」

明確に今の状況を言葉にすると、彼は気まずそうな表情になり、慌ててベッドから降りた。

てか、謝って後悔するぐらいならこんなことしなきゃいいのに・・・

なにより、良識ある大人なら、事後の影響とか支障とか考えられるでしょうに。要さんがこんなに安っぽい人間だったなんて、がっかりだ。

目の前の人を、もう、信用なんてできない。

「でも・・・しずちゃんも悪いんですよ？こうなったのは、ある意味、自業自得だったってこと、ちゃんと思ひ知って、これからは十分に気をつけなさい」

責める言葉と諭す言葉に、我が耳を疑う。

ええ、最大の落ち度は私にあるのかもしれない。兄の親友だ

からと、安易に他人を信用してしまったことは、浅はかだった。けれど、その言い草はあんまりに・・卑怯だ。理不尽すぎる彼の言葉の数々に、怒りが込み上げて来る。

「・・つまり、隙のある女はなにされても文句言えない・・そういうことですか？」

「いえ、隙というより、自己管理の問題だと思いますが・・。なにか・・怒ってます？僕はそんなに気分を害するおかしなことを言いましたか・・？」

「・・要さんの中では正当化されることなんでしょうけど、私は自己管理のなっていない甘い思考の人間ですから、納得できません」  
「正当化・・万人に訊ねたら、きっと半数以上が僕に賛同してくれると思います。誰の目からも、しずちゃんの行動は危険過ぎます。普通に考えてみて下さい。おかしいでしょう？だって」

どこまでも平行線。自覚がないのだから当然と言えば当然で、けれど、どの発言も私を苛立たせるだけで・・ああ、もう！こうなったら、はつきり言っただけ！！

スウツと深く息を吸い込み、胸の内の不満を一気に吐き出す勢いで、口を開いた。

「本人の意思を無視して、意識のない女の貞操を奪ったことに賛同？それこそ、有り得ない・・あつてはならないことでしょう！？誰の目から見ても、危険なのは要さんの思考で、普通じゃないのもあなたです！！」

「酔っぱらった状態でお風呂入るなんて、目回して当たり前です。倒れた音に気づいて、不躰に割り入って運び出したのは悪かったけ

ど、気づかずそのままだったら、風邪どころじゃすまない状態にな  
って

「……は？」

同時に吐き出したお互いの言葉を耳に、怪訝顔。

「私、お風呂で……倒れたんですか？でも、運び出したあと……し  
たんでしょ？」

「……本人を無視して、意識のない女性の貞操を奪ったって……な  
んのことです？」

またもや同時に言い合う。

「……」

噛み合っていない会話上で浮かび上がった疑問符に、私も要さん  
も難しい表情で押し黙った。

微妙に……論点がずれてる？

「……どうも、今朝方起こったことについて、それぞれの理解が一  
致していないみたいですね。しずちゃんは……僕になにかされたと  
思ってるんですか？」

至極冷静に問う声は、怒ってる風でも責める風でもなく、純粹な

興味が伺えて、私は素直に頷き、胸の内の疑問符を彼にぶつけた。

「初めてを戴かれちゃったのかと・・・だって、要さん。無理させたとか、血は出てなかったとか、それっぽいこと言っし、なにより・・・腰痛い」

「・・・ああ、なるほど。僕は随分と誤解される言い回しをしてしまったわけですね。道理で・・・参ったな」

大きな溜息を吐き、要さんは困ったように苦笑う。

「ええと・・・無理させたと言ったのは、昨晚、僕がお風呂を戴いたばかりにきみが入り損ね、朝方、酒気の残った身体で入るはめになり、そのせいで倒れる事態を引き起こして申し訳なかった、と思ひまして。血がどうのというのは、倒れた時にどうやら腰を打ったみたいで・・・内出血起こしたものの、傷は負ってなかったから、一応は大丈夫だと判断したんです。最も・・・結構、際どい位置だからじっくり見た訳じゃないし、僕には痛みの程度が解りません。だから、泣くほど酷い打ち身なら、病院に行こうと言ったんですよ」

「生憎、意識のない女性の貞操を奪う趣味はありません。そういう行為は、お互いの意識がはっきりしている時にこそ、肉体的にも精神的にも満たされるものでしょう？」

「はぁ・・・」

同意を求められましても、そういう経験のない私には解りかねます・・・。

ただ、自分の意識がないまま貞操を失った事実はないようで・・心底、安堵した。

と同時に、目の前の彼に対して、とんでもない誤解をし、一方的に失礼な言動と態度をとってしまった現実突き当たる。

別の意味で血の気が退き、次いで、カーツと頬に熱が灯った。

私・・なんてことを・・。

穴があつたら入りたい・・むしろ、この場に穴を掘って姿が見えなくなるよう、埋まってしまうい・・。

「そういうわけで・・僕に対する誤解は解けましたか？」

「・・はい・・それはもう・・綺麗に」

「では、僕は無罪放免ですね」

にっこりと穏やかに微笑まれ、罪悪感にチクリと胸が痛んだ。

いっそ、なじって責めて怒ってくれた方が気が楽なのに・・大人の余裕、格の違いを見せつけられた感。

なにがあつても、この人はきつと信じられる・・唯一の肉親である兄と同じく、信じていい存在であると、第六感が告げる。

それならば・・今後の、より良い関係を保つためにも、変なしこりの残らないきちんとした詫びを入れなければ・・。使命感のようなものが沸き立つ。

「・・いえ、私の誤解は重罪です」

「しずちゃん？」

「だって私・・要さんに強姦の容疑を掛けたことになるんですよ？見損なうな！って、怒鳴ってくれていいです」

「強姦って・・僕は別に怒ってませんよ。誤解される言い方をした

自分が悪いんです」

「いいえ！要さんは悪くないんです。そうよ・・よくよく考えたら、危ないところを助けて貰ったわけだし・・お礼とお詫びを兼ねて、私にできることがあれば申し付けて下さい。それで・・ちよっと都合いいかもしれないが、今回のことは水に流して戴けると嬉しいかも。以降は協力し合う、気さくに仲の良いルームシェア相手ということで・・どうです？」

「うーん・・」

関係修復のために打ち出した提案に対し、彼はひたすらに困った表情をした。

そんなに深刻に悩むことないのに・・。

「遠慮はいりませんよ？要さんがして欲しいこと、なんでもいいから、私に頼んで下さればいいんです」

「そう言われても・・」

「したいことがあればお手伝いしますし・・あ、こう見えて、体力にも自信ありますから、力仕事もいけます」

グツと拳を握ってアピールする。

こうなったら、なにがなんでも要さんの望みを叶えてやるのよ。意気込む私を見つめる目が、フツと細まる。

「・・本当に、なんでもいいんですか？例えば・・少し、痛い思いとかでも、受け入れてもらえますか？」

意味深な問い掛け。

「い、痛い思い？ 要さん、私を叩きたいのかな・・・実は、相当に怒ってたりして。」

「一見しては柔和な雰囲気です。穏やかなだけに、程度の解らない未知数な怒りを肌で感じ、内心で冷や汗が出る。」

「ここで怖じ気づいて、『痛いのは嫌です』と言えるはずもなく・・・私はビクビクしつつも頷いた。」

「それで、要さんの気が済むなら・・・が、我慢します」

「我慢・・・ですか。そうですね・・・どうやら、初めてみたいです。泣かせちゃいますよね。やはり・・・」

「・・・ええ、（男の人に面と向かってぶん殴られるのは）初めての体験ですね。まあ・・・耐えられますよ。子供じゃないんだから」

「いや、大人でもかなり痛いと思いますよ。男の僕には解らないけど、そういうものらしいから・・・」

「もしや・・・かなり、本気モードですか？」

「・・・ですね。僕もこんな短期間で、これほど気持ちが高ぶると思っただけです。」

「うう・・・いい大人が、叩かれたぐらいで泣き叫んだりしないって思ったけど、これはひよつとしくなくても相当にご立腹なようです・・・。手加減なく、男の人に殴られたら、そりゃ耐えられずに泣いちゃうほど痛いのは目に見えて明らかで・・・さすがに勘弁して欲しいですよ？ 要さん。」

「予想していなかった怒り具合を知り、血の気が退くとともに、冷や汗が背中を伝う。」

「しずちゃん・・・いい？」

いつの間にか、間近に寄った顔に覗き込まれ、大きな手に剥き出しの肩を掴まれ、危機感と畏れはピークに達する。

恥や外聞を気にする余裕なんてなくて、ただ、子供みたいにぶんと激しく首を横に振った。

「う、ごめんなさい！ やっぱ・・・痛いのは、嫌です」

言い切って、ギョツと目を瞑る。

自分からの提案を簡単に翻した後ろめたさ、なにより、拒んだことで次に彼がどう行動するかが怖かった。

しん、と静まり返る室内。

ここは、間を置いて冷静になって戴く方が身のためと思ったけど、これは逆効果かもしれない。沈黙がやたらと恐ろしく感じてしま

と、彼が小さく嘆息する気配。

「・・・そうですね。なし崩しでは意味がありませんし、なにより・・・  
きみが怪我人であったことを失念していました。僕の方こそすみません・・・」

優しい・・・穏やかな声だった。

おそろおそろ目を開いた先にあった要さんの表情も、やっぱり優

しくて、少し悲し気に眉を寄せているけれど、決して、怒っている感じではない。

これは・・・私を殴る気なんて、ない、わね。  
ホッと安堵したのも束の間、それじゃあ、彼は私になにを望んだのだろうか？

はて？と心の内で首を傾げていると、肩を掴んでいた手が頬を包み込み、彼の顔が更に距離を縮めて近づいた。

「ですから・・・貸し一つは、きみが万全な状態になって、痛みに耐えうる感情を僕に対して抱いて下さったら、確かな形で返してもらうことにします。ただ、貸しには利子が付くものですよ？まして、気の長い話になる可能性もありますし、それだけは、戴くことにします。宜しいでしょうか？」

「は・・・はあ・・・」

一気に捲し立てられ、言葉の意味が解らないながらも頷く。  
そして・・・とても嬉しそうに、艶やかに微笑んだ顔との距離がゼロになった。

呼吸が止まり、瞬きするのも忘れ、ただ、その一瞬の接触を体感する。

触れただけで、すぐに離れた唇の熱。

呆然と見上げると、レンズ越しではない濡れた裸眼に射抜かれて

「きみが好きです。だから、しずちゃんも僕を好きになってください。ルームメイトではなく、恋人同士に・・・僕はなりたい」

砂糖菓子のような笑顔を満面に浮かべながら、突拍子もない告白と、とんでもない要求をしてきたのだった。

## 04・いつのまにか

要さんから予想外の告白と要求をされた後、私たちはどうなったかと言えば・・・。

「うん。お手伝い戴いたおかげで、随分と早く片付け終わりましたね。有り難うございます、しずちゃん」  
「・・・いえいえ、どういたしまして」

今やすっかり、彼の物で整えられた部屋の中、ホッと安堵の吐息を洩らす顔を、複雑な気持ちで見つめる。

これで問題なく、要さんはこの部屋で、私と同じ生活空間を共有できるようになってしまったのだから。

あの瞬間、どう反応してよいものか・・・なにより、唐突すぎて信じ難い想いで放心しかけたところ、天の助けともいえる第三者の介入があった。

「ですが、週末の休みを潰してしまいましたね・・・すみません」  
「えーと・・・まあ、出掛ける予定もなかったですし。それにしても・・・お引越しの荷物、意外に少ないんですね」  
「ああ。家具とか処分してきましたからね。必要最低限以外は、こちらで買いそろえるか・・・鏡のものを借りるつもりでした」  
「なるほど・・・」

そう、私のとっての気まずい雰囲気を打破してくれたのは、皮肉

にも彼の荷物を届けに来てくれた宅急便屋さん。

二日酔いとお風呂で倒れた際の打ち身を案じ、休んでいるようにとの言葉を残して、要さんはそれらの介入を迅速に処理していった。そして、運び入れた自分の荷物を、早々と解き、片付けに没頭してしまう。

それはそれで好都合。

私は遠慮なく自室のベッドで横になり、彼の言葉に悶々としつつもひたすらに病人としての姿勢を貫き通す。

ちなみに、昼食と夜食は彼がコンビニへと走り、色々と買い込んで来てくれた・・・マメな人だ。

ただ、翌日になると少し冷静になり、甲斐甲斐しく世話を焼いては心配してくれた要さんに対する感謝の気持ちの方が勝る。

と同時に、不慣れな場所であるにも関わらず、自分都合で放ったらかしにしてしまったことが悔やまれ、引きこもってなどいられないと思った。

ドアをきっちり閉めていた私とは対照的に、彼の住処となる兄の部屋のドアは開け放たれており、段ボールの中から私物を取り出しでは、備え付けの家具にそれらをしまっけて行く動作が見える。

忙しそう・・・てか、なに話したら・・・。

が、昨日のことを思うと、どうしても声をかけることが出来ず、ドアの影に立ち尽くすしかない。

気配に気づいたのか、要さんが私の方を見た。

「しずちゃん。身体の方は・・・大丈夫ですか？」

身を案じる言葉に、つくづく彼の人の善さを実感する。

「・・・ええ。大丈夫です」

「良かった・・・あ、もうお昼なんですね。お腹空きました？ええと・・・今日はピザでも取るうかと思うんですが・・・宜しいでしょうか？」

「よ、よろしいです」

「では・・・申し訳ないんですが、注文お願いしてもいいですか？ちよっと手が離せなくて・・・」

数冊の本を手に取っては、棚に収めつつ、視線だけをお願いされ、コクコクと頷いた。

リビングに戻り、宅配ピザのメニューを手にすると、適当に品定めして電話を掛ける。日曜ということ、少し混んでるみたいだったけれど・・・まあ、急いでないし、いいかな？

「要さん。ピザ、一時間ほど掛かるそうです」

「わかりました。届くまで、ゆっくりなさっててください。僕は・・・片付けを続けます」

見れば、部屋の中は乱雑としていた。

これ・・・まだ時間掛かるだろうなあ・・・。

そんなことを思っぐるりと視線を這わせた後、再び彼に視線を戻すと、小さく苦笑する。

「今日中になんとかしたくて・・・やはり、整った状態で新たな門出を迎えたいですね」

「・・・手伝いしましょうか？」

こんな状況を見て、放っておけるほど冷血じゃない。

私の申し出に、要さんは手を止めて、少しだけ姿勢を正した。

「それは願ってもないことですが・・・いいんですか？」

「いいですよ。二人でやった方が早いでしょうし・・・」

「有り難う、助かります。・・・本当は・・・そう言っただけを期待していたんです」

悪戯っぽく無邪気に笑う顔に、不覚にもドキッとしてしまう。

そして二人、段ボールを紐解いては中身を取り出し、部屋の中を甲斐甲斐しく動き回る。

一時間ほど経過した頃の状況というのが 冒頭というわけ。

ああ、でも・・・ホント。片付け終わって良かったのかしら・・・。

それこそ、敵に塩を送ってしまったような、自らを窮地に追い込んでいるような、浅はかさをひしひしと感ずるのだけだ。

後悔と不安感に苛まれ始めた耳に、滑稽なほど明るい呼び鈴。

「ピザ、届いたようですね」

財布を手に、応対しようと腰を上げた彼を、慌てて追いかける。

「あ、私が出ますから・・・要さんは座ってて下さい」

「いえ、片付けを手伝って頂きましたし、ここは僕に奢らせて下さい」

「私が勝手にしたことですから・・・せめてワリカンに」

「・・・宅配でワリカンって、相手の方が困ると思いますよ。それに早く出てあげないと・・・こういうのって、時間厳守でしょう?」

玄関先での押し問答を責めるように、二度三度と呼び鈴を連射され、どうあっても譲る気配のない長身を前に、私は大きく肩を落として渋々引き下がった。

確実に弱い部分突いてくる要さんは、やはり侮れないと思う。

「おまたせしました」

ピザの入った大きな箱と、サイドオーダーに頼んだチキン、ポテト、そして飲み物が入った袋を下げた彼がリビングに舞い戻る。それぞれを店開きすると、香ばしい匂いが鼻をくすぐった。

「美味しそうですね。冷めないうちに戴きましょうか」

どこまでも笑顔で、マイペースな佇まいで食事を促す要さんを、ジッと見つめる。

優しい表情で、柔らかい口調で、丁寧な物腰で誤摩化されてるけど、よくよく考えてみれば最終的には彼の想い通りに事が運んでい

るではないか。

なにより、片付けを手伝う最中、私は衝撃の事実を知ってしまった。荷物の中にあつた仕事上の資料とおぼしき書類に書かれていた社名は。

「どうしたんです？難しい顔をして」

「………というか、要さんって、私と同じ会社だったんですね。知りませんでした……」

「ああ……僕は地方勤務でしたしね。知らなくて当然だと思いますよ？しずちゃんの方は、ですが。はい、どうぞ」

「あ……どうも」

意味深な言い方されて差し出されたピザを勢いで受け取ると、彼は涼しい顔でもう片方の手で摘まみ上げたピザを頬張った。

ますます膨らんだ不可解を眉間に刻み、考えの読めない横顔を見据える。

「“私の方は”って、要さんは知ってたってことですか？」

「知ってました。というより……きみの就職を斡旋したのは、僕ですから」

「は！？お、お兄ちゃんは知り合いの紹介って……あ……」

言いかけて、すぐに納得した。人事に明るい役職の知り合い「要さんである図式は、書類に明記されていた肩書きで、容易に成り立つ。」

人材管理課・課長。都築要。

それが、目の前の人の肩書き。

ふと、土曜の別れ際、親友のゆきちゃんが言っていた言葉を思い出した。

かなりの美形な上、相当なやり手・うん、こちらも納得。月曜を待たずして現物を拝めてしまった皮肉と、出来過ぎな巡り合わせに空笑い。

「そういうわけですから、会社でも宜しくお願いしますね」

「はぁ・・宜しく・・お願いします・・」

「明日からは、僕と一緒に車通勤ですね。交通の混み具合が解りませんし、三十分ぐらい早くでましようか」

「一緒・・えっ!?!」

につこり、さらりとした挨拶と、さも当たり前のように告げられた明日からの交通手段に、私はそれがとてつもなく空恐ろしい状況だということに、一拍置いて気づく。

窮屈なバス通勤から解放されるのは、正直嬉しい。

でも、そんなものは本当に些細なマイナス面で、会社サイドから見ただけ、私と要さんの関係。生活状況はお世辞にも良い印象を与えず、ともすれば（特に私にとって）無駄に敵を作る最悪パターンに発展しそうだ。

「い、いや・・私は今まで通り、バスで通勤を・・」

「同じ所に住んでいて、同じ会社に通うのに別々な手段で出勤だな

んで、無意味ではありませんか？」  
「私にはとつても意味のあることです」

即答し、押し問答を拒む姿勢で視線を落とすと、ピザをつかみ取って食を進める。

「言っておきますが・・・人材管理の仕事というのは、社員たちの交  
通費もチェックしてるんですよね。僕は最終的にそれらの可否を下  
すポジションにいるわけで・・・これがどういふことか解りますか？」

穏やかな声音とは裏腹に、含まれた意図は悪魔のごとき駆け引き  
で、誰がどう聞いても、彼の言葉は脅し。

「な・・・そういふの、“職権乱用”って言うんじゃないんですか！  
？」  
「“経費削減”“一挙両得”と、言って下さい。それに・・・鏡に頼  
まれましたからね。しずちゃんを全身全霊を賭けて護れ、と」

クスツと忍び笑われ、カツと血が上る。

「誤摩化さないでください。というか、この際、お兄ちゃんと言  
ったことは忘れて下さい！どうせ、シスコンの戯言なんだし、昨日  
今日逢ったばかりの要さんに護って貰う筋合いは・・・」

「あるでしょう？」

確実にトーンダウンした声。  
彼の大きな手が、私の頬を包み込む。

「僕はきみが好きだと言ったはずですよ。そうやって頑なに想いを疑うのであれば、こちらにも考えがありますよ」  
「要、さん？」

「まずは・・・今日の分の利子を戴きましようか」

くいつと口角を上げ、少し意地悪な笑顔を見せた要さんは、昨日より少し長いキスをした。

頬を包む大きな手のひらの熱が・・・なにより、唇に落ちた熱が少しも不快なんかじゃなく、むしろ、心地よいと安堵さえしてしまい  
そんな自分に、大いに戸惑う。

いつのまにか、彼という存在に惹かれている自分が、確かにいた。

## 05・いてくれてありがとう

都築要という人が侮れないことは承知していた・・つもりだった。こちらにも考えがあるとの宣戦布告を、私はもっと深刻に受け止めるべきだったのかもしれない。

すべては、あとの祭り。

「千景さん。こちらの資料をデータ化しておいて戴けますか？」

「・・・はい」

書類の束を受け取りながら、小さく溜息を吐く。

元々、私の受け持ちはデスクワークだったし、仕事内容として言うなら、特に問題はない。

問題なのは・・どこまでも柔和な表情で、いわゆる上座に席を構える課長の存在。

「都築課長。この書類なんですけどお、チェックして戴けますかあ？」

「はい、見せて。 うん、オッケーです」

同僚の甘ったるい声に笑顔で対応しているのは、私のルームメイトにして、つい先日、上司となった要さん。

彼の言う“経費削減”“一挙両得”という名の脅しに泣く泣く屈した私は、一緒に通勤することになったばかりか、その日の内に所属課移動の通達を受ける。

幸いだっただのは、同期で一番仲の良いゆきちゃんも一緒に移動だったこと。

もちろん、黒幕は要さん。今や、すっかり人材管理課の一員として、毎日、彼から業務を仰せつかる立場になってしまった。

けれど・・・移動して早々、私はある意味の修羅場を迎える。

要さんが来たことで、人材管理課は新たなトップの元、再編成することになり、その名簿を作成している時のこと。

「あれえ・・・都築課長、この住所って・・・」

みんなの住所を入力していた甘ったるい声の同僚こと、村上レイナさんが二枚の紙を交互に見つめ、首を傾げた。

嫌な予感・・・。

「・・・なんで、千景さんと同じ住所なんですか・・・？」

言ってくれるな、というささやかな祈りは、村上さんに届かなかった。

もちろん、ゆきちゃんにだけはルームシェアの一件を明かしておいたから、この時、特別視されることはなかったけれど・・・その他、事情を知らないみんなの目が一斉に私と要さんとを往復する。

「ええと・・・それは・・・」

「ああ、僕と千景さん、一緒に住んでるんだよ」

どう説明したものかしどろもどろに言葉を詰まらせる私とは対照的に、彼はあっさりと・・・それはもう、なんの迷いもなく、真実を口にした。

「え？」

「は？」

「なん・・・」

「ええええええ？」

それぞれがそれぞれに驚きの声を上げ、好奇の目と嫉妬の目を向けられる。

「課長と千景さんって・・・そういう仲だったんスか？」  
「なにそれ・・・どういこと・・・？」

言わんこつちやない・・・だから、同じ課なんて嫌だったのに。

「あーあ・・・嫌なバレ方したね。大丈夫？ 零・・・」  
「なんとか・・・」

じわりと額に滲む汗。居心地の悪さに、泣きたくなる。

「・・・いや、違うよ。僕の親友が彼女の兄で、居候させて貰ってるんです。つまり、僕と千景兄妹の・・・三人暮らしなんだ」

「三人・・・？」

「ええ。だから、同居している手前、通勤も一緒にしてるけど、僕と千景さんは特別な関係などではないんですよ。その気もないのに仲を疑っては、彼女の迷惑になります。やめてあげて？」

「なあんだ、そっかー。はい、わかりましたあ」

「・・・有り難う。宜しくね」

言い繕って、につこりと笑う表情に、なぜか心が沈んだ。

私のためを思っている嘘なのは明白で、これで不利になりかけた自分の立場は護られる。

そう、護られた・・・護ってくれたんだ・・・けど。

「では、仕事を始めましょう。千景さんも・・・頑張ってください」  
「・・・はい」

事務的な笑顔と、その他大勢への同じ物言い。

「ふーん・・・大人ね、都築課長。でも・・・複雑な女心の理解力は足りないわ。ね？ 雫」

「別に・・・なんとも思っていないわ」

苦笑するゆきちゃんを軽く睨み、私は穏やかじゃない心中で、仕事に向き直る。

そうよ。ここまで徹底することはないんじゃないの？  
家での彼とのギャップに、裏暗い悶々さが募った。

あの日から、利子と称して要さんは毎日私にキスをする。

柔らかく、甘く微笑んでは、暖かく大きな手で頬を包まれ、好きだと繰り返して囁く。

まるで飴と鞭だ。

実際、悔しいけれど私の心は確実に要さんに傾いてしまっている。

彼の一拳一動、言動に一喜一憂している自分が確かにいるのだから。

・まさに思う壺。

陥落するのは時間の問題のように・・・思えた。

それから更に数日が経ち、会社の業務にも慣れ、私生活も許容範囲と割り切れるようになった頃、最初の転機が訪れる。

「・・・千景さん、ちょっと話があるんだけどお？」

一日の業務が終わり、帰り支度を終え、地下の駐車場へと向かう途中、呼び止められた。

聞き慣れた甘ったるい声・・・村上さんのものだ。

振り向いて見ると、相変わらずのバツチリメイクにフワフワ赤茶色の巻き毛を揺らし、色香漂うデザインの私服を着込んだ彼女が、愛らしく小首を傾げている。

なんだろう・・・要さん、待っているのに。

今日は珍しく定時で終わり、密かに外食でもしようかと約束していた。いざ、出立というところで忘れ物に気づき、急ぎ取りに引き返して車へ戻る途中、呼び止められる。

「話つて？」

「あなた・・・勘違いしてないわよねえ？」

「は？」

勘違い？

「都築課長に特別だと思われてるだなんて、自惚れちゃ駄目よってこと」

ああ・・・なるほど。これはアレだわ・・・色恋沙汰の裏工作？

村上さん、見るからに要さんに気があるのバレバレだしね・・・

別に自惚れてなんかいないけど・・・彼が私に気があるのは勘違いじゃなく真実なのよね・・・

小さく嘆息し、ここは事を荒立てずに聞き流して場を乗り過ごそう、と思った矢先。

「むしろ、千景さんが一番、範囲外かも。ねえ・・・気づいてたあ？」

どこか馬鹿にしたような、余裕たっぷりの笑顔にピクリとこめかみが震える。

生理的な嫌悪感と、本能的な危機感・・・彼女は私を“傷つける者”だ。

言葉をマトモに受けてはいけない。働いた自己防衛は、しかし、悲しいほど薄い盾だった。

「都築課長、あなたにだけはなぜか一言一句すべてが敬語なのよねえ。それってどこまでいっても、砕けた関係にはなり得ないって、境界線引かれてる証拠じゃないかしらあ？」

「っ・・・」

最も気になっていた部分を突かれ、息が止まる。

その・・・通り。

要さんはどこまでも丁寧な物腰を、私限定で貫いている。その意味を、意図を考えないようにしてきた。

気のせい、だと。

でも・・・彼女の言うように、本当は・・・。

「しずちゃん。遅かったですね」

「・・・ごめんなさい、お待たせしました」

運転席から私の顔を伺う視線に身体ごと背けながら助手席へと座り、小刻みに震える手でシートベルトを締める。

当然、私の様子のおかしさは一目で隣人に見抜かれた。

「どうしました？表情が暗いですよ・・・どこか具合でも悪いんです

か？」

「・・・少し、気分が悪くて・・・多分、疲れているせいだと・・・」

「それはいけませんね・・・。外食はまた今度にして、家に帰りましょう。今日は僕がなにか軽く食べられるものを作りますよ」

「・・・うん・・・ありがと」

家に帰り着くと、具合が悪いとの言葉を真に受けたいらしい彼は、いつも以上に優しく接してくれて、眠りにつくまで体調を心配してくれた。

その日、要さんがした利子のキスは・・・頬に触れるだけのもの。

口づけが長くなってきていた最近を思えば、嫌でも物足りなさを感じてしまい、そこまで気遣う理由は村上さんが言っていた“境界線”なのではないかと、不安に駆られる自分がいた。

それは自分勝手に、自分本位な、彼の本気をないがしろにした我が儘であると思ひ知るのには、第二の転機。

翌日、職場に掛かって来た一本の電話が、私と要さんの曖昧な関係に終止符を打つことになる。

「千景さあん、5番に外線入ってるよお」

甘ったるい声に呼ばれ、首を傾げた。

外線だなんて・・・一体、誰だろう。私の知り合いで用があれば、携帯に掛けて来るはずなのに。

「あ．．はい。今、取ります」  
「プライベートなら、携帯とかに掛けて貰うようにしたらあ？会社の電話私用で占領とか、困るのよねえ」  
「．．すみません．．」

嘲笑う村上さんの声に小さくなりながら、受話器を取る。

「お電話代わりました、千景ですが．．」  
『千景．．雫さん？鏡ちゃんの、妹さん、よね．．？』

初めて聞く女性の声だった。“ちゃん”付けで呼ぶことから、親しい間柄なのだろうとの察しはつくけど．．誰？

「．．そうですが。どなたです？」  
『あ．．ご、ごめんなさい。名も名乗らず．．あたし、鏡ちゃ  
お兄さんの同僚で、伊万里飛鳥いまりあすかと申します。あの．．落ち着いて聞  
いて欲しいんですけど．．』  
「はあ．．？」  
『たった今、お兄さんが、事故に遭われたの』

聞いた瞬間、スツと血の気が退いた。  
お兄ちゃんが．．事故．．？

『それで・・・今から手術をすることになって・・・』

事故・・・手術・・・それほどに兄の状況は悪いんだろうか・・・もしかしたら、死んでしまう・・・？

受話器を持つ手が震え、目の前が真っ暗になる。

ふらりと傾いだ身体を支えてくれたのは・・・いつの間に寄ったのか、慣れた気配。

気遣う瞳がレンズ越しに私の顔を覗き込む。

「千景さん・・・どうしたんですか？やはり、まだ、体調が・・・」

「・・・要さん・・・どう、しよう・・・お、お兄ちゃ・・・お兄ちゃん、が、じ、事故に・・・」

込み上げる嗚咽を必死で押さえ、どうにか、それだけ告げた。言葉にした途端、耐えていたものが一気に溢れ出す。

「栗っ！？」

駆け寄ろうと席を立つゆきちゃんを、課長である要さんが首を振って押しとどめる。

室内のざわめきを感じながらも、しゃくり上げて泣き出した私には、もう、冷静な対応なんて無理で、滑り落ちた受話器を取り、代わってくれたのは彼だった。

「・・・お電話代わりました。都築要と申します。あとは僕が・・・ええ、そうです。はい、ええ、ええ・・・そう・・・ですか・・・ちよっとお待ち下さい。確認してみます」

一通り話を聞いたらしい要さんが、私へと向き直る。

「一応、手術には家族の承諾が必要なんだそうです。受けますよね？」

「っ・・・お、お願いします！お兄ちゃんを・・・お兄ちゃんをたすけて・・・」

「手術してください。はい、あとはそちらにお任せしますので・・・鏡のこと、宜しくお願いします」

それからお互いの連絡先を伝え合い、一言三言、言葉を交わして、彼は電話を切った。

一部始終を見つめて思う。私、どうすればいいんだろう・・・すぐに駆けつけられる距離じゃないし・・・。

なにも出来ない自分が不甲斐なく、唯一の肉親を失うかもしれない現実に、ただ泣くことしかできない。情けないよ・・・。

「しずちゃん・・・鏡は死んだりしませんよ。とにかく・・・自宅待機で、伊万里さんからの連絡を待った方がいいでしょうね・・・水島くん。僕と千景さん、早退しますから、あとお願いします。狭山さん、千景さんのフォローを・・・」

「あ・・・はい」

宥める仕草で私の肩を叩いた要さんは、次長である水島さんとゆきちゃんに指示を出し、自身も取り急ぎ帰り支度を始める。

「雫・・・はい、カバンとコート。きっと大丈夫・・・大丈夫だよ」

「うん・・・ありがと、ゆきちゃん・・・」

ぎゅつと力強く手を握り、笑顔で励ましてくれるゆきちゃんに、プラスの涙を誘われた。

不安が少し和らぎ、希望を持って前を向こうとした矢先、場を壊す甘ったるい声。

「えー、なんで都築課長まで早退なんですかぁ？千景さんだけ帰ればいいと思いますけどぉ・・・」

「あんた・・・状況、分かってるでしょ？雫のお兄さんが危ないのよ！？」

「だからってえ、わざわざ、課長が付き添わなくてもぉ・・・。忙しい立場なのに、私用で仕事の邪魔しちゃ悪いって、普通は遠慮するもんじゃなあいい？」

「っ・・・最低。私情丸出しなのはどっちよ・・・」

呆れた、と、眉をひそめるゆきちゃん。

暗黙に彼女が言いたいのは、一人で帰れと言うことなんだろう。

嫉妬と悪意に満ちた村上さんの言葉は、今の不安定な私にはきつすぎて、うまく反応できない。

「・・・課長」が私用で早退は、聞こえが悪い。そういうことかな？」

静かな低い声。表情こそ柔らかかなのに、要さんの目は鋭くて、笑っていないかった。

と、机の中から一枚の紙を取り出した彼は、一斉に注目を浴びる前で記入し、自分で認め印を押して、それを村上さんに差し出す。

「これ・・・は？」

「見た通り、有給休暇届け。人材管理課課長・都築要、ならびに、人材管理課雑務処理係・千景雫は、今日より三日間、有給で会社を休ませて頂きます」

「都築課長・・・」

「会社で定められた枠内で、きちんとした手続きをとっての“休暇”ということなら、立場の問題もなにもないだろう？」

にーっこり。上辺だけの笑みを造り、そう切り捨てた彼の手が私を肩を抱いて、用は済んだとばかりに歩みを進める。

「・・・どうしてそこまで・・・千景さんの面倒を見ようとするんですかあ・・・」

「どうして？そんなの決まってるでしょ。好きな人を支えたいと思うのは当然だし、彼女絡みの面倒なら、苦なんて一つもないからだ  
「お

肩越しに一瞥しての決定打。

それきり、私たちを止める声は掛からなかった。

そして・・・この瞬間、私の心は陥落したのだった。

怒濤の一日が終わろうという時、吉報はもたらされる。

兄の手術が無事に成功したと、伊万里さんから電話がかかって来たのだ。

「ほ、本当ですか？よかった・・・本当に・・・よかった・・・」

受話器を握りしめ、安堵の感涙にむせぶ。

それから・・・涙する私に優しい言葉を掛けてくれる伊万里さんとの電話は、切るタイミングを失い、延々と一時間ほど経っていた。

「・・・しずちゃん。伊万里さんも疲れているでしょうし、鏡が無事なら、また後日、改めて電話しなさい」

諭され、ハッと気づく。

「あ・・・そ、そうですね。ごめんなさい、伊万里さん・・・」  
『ううん、いいのよ。顔を見て安心出来ない分、話すことで安心出来るなら、お易い御用だわ』

「・・・有り難うございます」

『明日には鏡ちゃんも話できるはずだから・・・それじゃあ、ええと・・・おやすみなさいでいいのかしら?』

「はい、おやすみなさいです」

「お世話になりました、伊万里さん。おやすみなさい」  
『おやすみなさい』

明るい挨拶の声を最後に、電話は切れた。

フーツと、肩から力が抜ける。何度目か分からない「よかった」を胸の中で復唱し、いまだに涙の滲む目を軽く擦った。

「目、痛いんですか? ああ、こんなに赤く腫れて・・・氷で冷やした方がいいかもしれませんね」

おもむろに両手で私の頬を掴み、ごく近い距離から覗き込んで来る彼。

この体勢で繰り返し交わされた情事がフラッシュバックして、一気に意識してしまふ。

考えてみれば、要さんははっきり公共の場で私が好きだと言ってしまった。お互いの気持ちを通じ合っている事実をまだ知らない彼は、私から明確な意思を示さない限り、一方的な片思いとして振る舞い続けるだろう。

そんなことは我慢出来ない。

私はもう、自覚してしまった。自分の想いを。  
同じ仕草で彼の頬に両手を添える。

「しずちゃん？」

戸惑う唇に、そっと自分のそれを重ねた。  
予想外の行動だったのだろう。目を見開いて固まる彼。

「要さん・・いてくれてありがとう。私も、あなたが好きです。好きに、なりました。ルームメイトではなく、恋人になってください」

言って、きゅっと抱きつく。というより・・あまりの気恥ずかしさに顔を見ていられなかったただけなんだけど・・。

惚けて微動だにしなかったのは数秒で、すぐ、応えるみたいに背中腕が回り、抱きしめられた。

「喜んで」

申し入れへの答えは、同じ言葉での快諾。  
けれど、二人の関係はルームメイトから・・恋人へ。

## 06・きみが欲しい

「そうそう、私、要さんにどうしても訊きたいことがあるんです」

兄の手術の成功を聞き、二人の関係も進展して、肩から荷が下りた状態。

夕食もお風呂も済ませ、ゆったりくつろぎ時間に突入というところで、そう、切り出した。

「訊きたいこと？なんででしょう」

リビングのソファーに座り、グラスワインを手に、首を傾げる彼。やっぱり、物言いが丁寧。

「どうして、私に対してだけ頑なに敬語なんですか？」

「・・・しずちゃんだって、敬語じゃないですか」

軽い返しに、むうっと頬が膨らむ。

真面目に訊いてるのに。

「私のはいいんです。要さんは年上だし、上司だし・・・なにより、ただ一人だけ徹底してるわけじゃないし」

「・・・それがなにか問題なんですか？」

「問題というか・・・なんだか、それってどこまでいつても、砕けた関係にはなり得ないって、境界線引かれてるみたいで・・・」

村上さんに言われた言葉を思い出し、消沈してしまう。

けれど、肝心の当人は・・・驚くことに、声を立てて笑った。

「は・・・はははっ！」

「な・・・なにがおかしいんですか!？」

「いえ・・・すみません。事前に、話すべきでしたね。しずちゃんの誤解は最もです。僕の中には、特異な分類方法があるんですよ」

「特異な・・・分類方法？」

「ええ」

私の隣でひとしきり笑った要さんは、大きな咳払いを一つすると、その方法とやらを話し始める。

「まあ、そんなに大したものではないんですが・・・好意を抱いていればいるほど、相手に対して敬語になるんです。砕けた物言いはむしろ、格下と見ている場合か、それほど重要視していない相手ということになります」

あ・・・だから、村上さんに対してはあんなに・・・。

・・・あれ、でも・・・待って。それに当て嵌まらない人物もいるよ  
うな？

「・・・お兄ちゃんに対しては敬語じゃない気がするんですけど・・・」  
「鏡は・・・」

途端に困った表情になる。

「鏡に対しても、もちろん敬語だったんですが・・・気色が悪いと言われましてね」  
「・・・」

なんて失礼なことを・・・お兄ちゃん。

暴言を吐く兄の姿が容易に想像できて、私は穴があったら入りたい気持ちになる。

身内の恥だわ・・・。

「・・・ごめんなさい、傷ついたでしょ？よりもよって、気色悪いだなんて・・・」

「いえ、その逆です」

「はい？」

「面と向かって気色悪いと言われ、面白くなってしまってますねえ。彼だけは故意に敬語をやめるよう、努力したんですよ。新鮮な試みでした」

つまり・・・要さんの中で、お兄ちゃんは完璧に珍獣扱いで、飼いなからすため、手数を変えただけ、と。

我が兄ながら扱いに同情したのは一瞬で、すぐに自業自得だと思  
った。

「まあ、鏡の言ったことはともかく・・・しずちゃんはどっ感じまし  
た？」

「え？」

「やはり・・・変だと思われませんか？」

眼鏡の奥の瞳が、翳りを見せる。

要さんの言葉を反復して考えてみた。

そりゃ、村上さんに言われたみたいな不安はあったけど、彼の言  
葉遣いや物腰が変だと思ったことはない。

「別に、変じゃないと思いますよ？」

むしろ、ドキドキすることの方が圧倒的に多い気がした。

「しずちゃんは・・・好きですか？」

「ええ、紳士的で良いと・・・」

「良いとかではなく、好きかどうかを訊いてるんです」

お風呂上がりはまだ水気の残る髪がなんだか艶っぽく、妙に色気  
のある視線が私を捕らえ、不必要に胸が高鳴る。

「・・・好き、ですよ？」

「そうですね？」

ふわりと微笑む彼。

コトんと、手に持っていたグラスをテーブルに置き、姿勢を正す。  
なんだろう？と見つめる顔が、どんどん近づいて。

「でしたら・・・そろそろ、貸しを返して頂きたいのですが。そちらの方はいかがです？」

覗き込まれ、腰に腕が回された。

至極近い距離にある端正な顔と緩い抱擁に動揺しつつも、私と要さんは恋人になったんだ、という現実を思えば、振りほどくことは無粋で、熱く火照る頬を押さえながら受け入れる。

「そ、そういえば・・・お風呂で倒れたときに誤解したお詫びのアレですよ？」

「ええ。念のためにお訊きしますが、なんのことか分かってます？」

確か・・・万全な状態になって、痛みに耐えうる感情を要さんに対して抱いたら、確かな形で返してもらおう。と。

え・・・もしかしてそれって・・・あぁっ！！

彼の求めるものがなんなのか、ここへ来て、ようやく理解した。

「・・・」

「分かったみたいです」

一気に体温が上がり、頬どころか身体全体が熱を帯びる。ていうか、利子がキスって時点で気づくでしょうが・・・。

「私って・・・鈍いですね・・・」

「そんなきみも好きですけどね」

「うー・・・」

「それで・・・答えは？」

「あの・・・今から・・・？」

急展開に、気後れた感情が往生際の悪い抵抗を試みた。

「今から。もちろん、無理強いする気はありませんが・・・僕としてはかなり、限界ですよ？」

困ったように薄く微笑む。

うう・・・そんな表情されたら、断れるものも断れないじゃない。なにより、要さんに触れられることは、嫌じゃなかった。好きという感情が、触れ合うことを嬉しいと認識する。

そういう感覚があって、なお、気後れてしまうのは、未体験の領域に足を踏み入れることへの怖れと、私の全てを知ること、彼が幻滅してしまうかもしてないという恐れ。

嫌われたくない・・・。

「しずちゃん、頭で考えては駄目ですよ」

「え？」

「僕らがこれからしようとしていることは、理屈ではなく、愛しいと想う気持ちが感情的な本能として求める必然です。全てを知り合うことで、幻滅されてしまうかもしれないという畏れは・・・僕にもあります」

「・・・要さんもこわいんですか？」

「ええ。ですがそれ以上に・・・僕はきみが欲しい。しずちゃんの全てが知りたい」

大好きな人にここまで言われて拒む術なんて、私にはない。

覚悟は 決まった。

「要さんには、もう、裸も見られてしまいましたしね。責任取ってくれないと・・・いいですよ、私を貰って下さい」

「遠慮なく・・・戴きます」

心からの笑顔を浮かべ冗談混じりに言うと、彼はとても嬉しそうに、そして、少しだけ照れた表情で私の額に軽く口づけ、おもむろに身体を抱え上げる。

いわゆる、お姫様抱っこ・・・。

わわっ・・・もの凄く恥ずかしい。

けど、それ以上に恥ずかしいことをするのよね？・・・うう・・・緊張してきた。

自然に強張ってしまう身体。要さんの歩みが止まる。

「・・・月並みですけど・・・」

「？」

「なるべく、優しくしますから・・・僕を信じて下さい」

「・・・うん、信じます」

自分で考えていた以上、彼が思う以上に、私は要さんが好きなのかもしれない。

暖かい微笑み、真摯な眼差し、そして・・・丁寧な物腰し。

そのどれもが、私を虜にする。

お兄ちゃんが元気になったら・・・報告すべき、よね？

もう一波乱も二波乱もありそうだけど、二人なら乗り越えられるはず！

【アクシデント・終】

## 06・きみが欲しい(後書き)

ご愛読いただきまして、ありがとうございます。

この話はこれでおしまいですが、ご要望があれば、なんかしら書き足したいと思います。

よろしければ、ご感想などお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9483s/>

---

accident-アクシデント-

2011年8月23日23時43分発行